

謝辞

本研究を遂行し、まとめるにあたって、実に多くの方にお世話になりました。この場を借りて、感謝の意を述べさせていただきたいと思います。

まず、指導教官主査の武藤佳恭先生は、自由な雰囲気のもと、研究環境から学会発表の支援まで、さまざまな面で見守っていただきました。そして、同じく主査ともいえるほど指導・支援してくださったのが、竹中平蔵先生です。竹中先生は国務大臣を務めるにあたり、最終的には副査から抜けることになりましたが、研究の初期段階から実に多くの議論につきあっていただき、また研究環境の面でも支援していただきました。古川康一先生には、大学院プロジェクトを通じて助言をいただき、あたたかく見守っていただきました。本論文の執筆に入るころ、「歴史に残る博士論文を。」という励ましをいただいたことで、思い切って取り組めたように思います。大岩元先生には、直接的な助言だけでなく、後に述べる技術的な協力者の方々の指導教官としても間接的に多く助言をいただきました。小澤太郎先生には、修士のころから、折に触れてアドバイスをいただきました。熊坂賢次先生は、「新しい考え方で世の中をみるには、分析装置も新しくないとね。」と、本論文の意義を指摘してくださいました。

本研究の後半戦は、千葉商科大学に勤めながら進めました。千葉商科大学学長の加藤寛先生、政策情報学部長の井関利明先生には、研究環境の支援だけでなく、内容についても助言をいただきました。また、同僚であり、同じく博士(政策・メディア)を目指す玉村雅敏さんと久保裕也さんには、幅広く議論していただいただけでなく、幾度となく励ましの言葉をいただきました。

本論文の内容は、私が立ち上げ代表をしている Boxed Economy Project のメンバーとの共同研究に多くを負っています。もともと社会・経済シミュレーションのフレームワークとシミュレーション・プラットフォームの構築ということを掲げてはいたものの、それを現在の BEFM や BEBP のようなきわめて洗練されたかたちで実現することができたのは、中鉢欣秀さんの力が不可欠でした。そして、BESP の開発にあたり、海保研さん、松澤芳昭さん、浅加浩太郎さん、青山希さんには、かなり力を注いでいただき、設計思想や実装面での貢献ははかりしれないものがあります。また、上橋賢一さん、津屋隆之介さん、田中潤一郎さん、高部陽平さん、廣兼賢治さんとは、BEFM を作成するにあたり、かなり時間をかけて一緒に議論していただきました。特に、上橋さんとは、社会科学における BEFM の役割・意義について、徹底的な議論

を行いました。また、津屋さんには、本論文の執筆の段階において、モデル作成や作図などの点でも協力していただきました。そして、山田悠さんには、人工株式市場モデルの作成や科学哲学的な議論などにおいて協力していただきました。北野里美さんと森久保晴美さんには、ビジネスとの接点や国際化に向けての準備などでお世話になりました。岡部明子さんには、モデル・パターンの作成や作図等で協力していただきました。そして、Boxed Economy Project のメンバーではありませんが、島広樹さんと岩村拓哉さんとの議論や構想も、本研究の下敷きになっています。社会・経済シミュレーション、ひいては社会科学に、オブジェクト指向、フレームワーク、プラットフォーム、パターンなどを導入するという本研究の方向性が構想されたのも、島さん、岩村さんとの議論を行った初期の段階でした。

学会においてさまざまな先生方に助言と叱咤激励をいただいたことは、本研究に大きく影響しています。ここですべての方のお名前を挙げることはできませんが、その中でも特にお世話になった方は、塩沢由典先生(大阪市立大学)、寺野隆雄先生(筑波大学)、生天目章先生(防衛大学)、出口弘先生(東京工業大学)、松井啓之先生(京都大学)、和泉潔さん(産業技術総合研究所)である。また、進化経済学会の若手研究者の方々、西部忠さん(北海道大学)、吉田雅明さん(専修大学)、橋本敬さん(北陸先端科学技術大学院大学)、江頭進さん(小樽商科大学)、中島義裕さん(大阪市立大学)、篠原修二さん(京都産業大学)、遠藤正寛さん(慶應義塾大学)、鈴木健さん(東京大学)、吉地望さん(北海道大学)、澤辺紀生さんとも、有益な議論をさせていただきました。

武藤佳恭研究室の仲間、そしてノーベルコンピューティングプロジェクトの仲間には、いろいろとお世話になりました。特に、『複雑系入門』の共同執筆者である福原義久さんや、吉池紀子さん、館俊太さん、岡宗一さん、武田圭史さんには、博士論文とそれに関連する提出書類のことについて、相談にのっていただきました。

本研究を遂行するにあたり、フジタ未来経営研究所から研究環境と多額の予算支援をいただいています。藤田田名誉所長および藤田元所長をはじめとして、事務局と研究員の皆様にはさまざまな面でお世話になりました。また、本研究の一部は、日本学術振興会特別研究員(DC1)時代に行ったものであり、文部省科学研究費補助金(特別研究員)の支援を受けています。また、何度かにわたる森泰吉郎記念研究振興基金の支援、森基金国外学会発表経費補助、および高度科推進研究費をいただいで遂行されています。

最後に、父 亨と母 伎世子、弟 麗、そして妻 美穂は、研究生活のベースを支えてくれました。

以上の皆様の助言・支援・協力・励ましに対し、深く感謝申し上げます。

井庭 崇